

ニュージーランド保育実践と乳幼児の記録 —個人の学びの旅を可視化するラーニング・ストーリーの効果とは—

New Zealand Childcare Practices and Infant Records
—The effectiveness of “Learning Stories” in visualizing an individual's learning journey.—

講演者：谷 島 直 樹（学校法人 清明学園幼保連携型認定こども園 おかだまのもり園長）

Speaker : Naoki YAJIMA (Principal of Okadamanomori Early Childhood Centre, Educational institution Seimei Gakuen)

抄録作成：三 好 伸 子（人間科学部こども学科教授）

Abstract Creation : Nobuko MIYOSHI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

本稿は、2023年度金沢星稜大学人間科学部会学術講演会の抄録である。ニュージーランドで保育者・教育者として勤務した谷島氏は、『テ・ファリキ』（Te Whariki）の思想や、「子どもは生まれながらに学ぶことを熱望して家族のもとに来ている」という子ども観、信頼を基本とするアプローチ「信頼モデル」等を伝えた。ニュージーランドの教育ビジョンを紹介して日本の保幼小連携やカリキュラム観について参加者に考える場を与えた。

現在実践中のラーニング・ストーリー（子どもの育ちの記録）を用いて、参加者と意見交換を行った。多様な子どもの育ちを植物に例えて、それぞれに異なる育ち方を捉えるためにlearning disposition（学びの構え）と、assessment（評価）が重要だと話した。ラーニング・ストーリーは、「その子の成長の過程を見え、子どもの時の自信を大人になった時に見返してエンパワーする可能性を持っている」とまとめた。

〈キーワード〉

ニュージーランド、『テ・ファリキ』、信頼モデル、ラーニング・ストーリー

1 挨拶、自己紹介、ニュージーランドについて

ご紹介預かりました谷島と申します。三好先生からメールがきて、今回お話をさせていただくことになりました。本日は、金沢星稜大学人間科学部学術講演会に呼んでいただいてありがとうございます。初めて金沢に一昨日から来て東茶屋街を歩いて、三好先生と「ぶりしゃぶ」をいただきました。金沢は温かい雰囲気があって、歴史を感じるいい場所だなと思っています。明日帰るのはもったいないですけど、今北海道も雪が降って積もっているらしいのでそれも楽しんでいけたらと思います。

私は、ニュージーランドの保育が好きです。これか「信頼モデル」なども進めていきたいなと思っていますので、子どもが映っているところ以外の講演内容を、ぜひSNSとかあげてください。インスタも登録していただけたら嬉しいです。私は三好先生と今日参加している先生方と一緒に、先週ニュージーランドに行ってきました。（写真紹介）今日は、ニュージーランドの動画写真をたくさん持ってき

ましたので、一緒にニュージーランドの保育に密接に関わっている記録、ラーニング・ストーリーを書く体験をしたり、隣の人と話したりしてもらいたいと思っています。

ニュージーランドの人口は、500万人ぐらいで、飛行機で日本から約11時間かかります。『テ・ファリキ』というのがニュージーランドの『ナショナルカリキュラム/テ・ファリキ』のことで教育方針です。ニュージーランドでは、200ヶ国語が話されて、130の国や地域の人たちがいるスーパーマルチダイバーシティといわれています。公用語は英語と先住民のマオリ族のマオリ語と、ニュージーランド手話です。

2 『テ・ファリキ』の子ども観「信頼モデル」

ここから本日のテーマ、『テ・ファリキ』の子ども観です。信頼モデル、欠乏モデルと言う言葉がありますが、今日の話の90%は、ラーニング・ストーリーの理念の信頼モデルです。みなさん、一緒に言ってもらってもいいです

か。「セーの、信頼モデル」ありがとうございます。

では、動画を見ていきましょう。この動画のような子どもの姿があったら、この姿を私たちはどう分析するか、ということをやっていきたいと思います。この動画の黄色い服の子どもを中心にみてください。この黄色い服の子どもの遊びは自分の動機で始めていて価値があるものだと思います。考えてほしいのは、この子どもは何を学んでいると思いますか。どんな価値があると思いますか。この子にもし明日会おうとしたら、何を用意してあげればいいでしょうかなどを、考えながら見ていただきたいです。(動画視聴)

いかがでしょうか。何が言いたいかというと、人によって分析が違うという話をしたかったのです。ある方が見たら料理をしているように見えるし、ある方が見たら発掘しているように見える。そのように見え方が違うのに、もし私たちの子どもの成長の目的が「子どもが全員文字を書けるようになる」とか、「みんなが一緒に雪だるまを作る」などの目標だったら、これは価値のない遊びになってしまう。でもみてください。コーヒーの香りを使いながら、もしかしたら味見もして五感を使いながら遊んでいる。この遊びをどう分析するかという話をこれからしていきます。

そのために、保育の質、適切な援助とはなんなんだろうと考えましょう。私は日本とニュージーランドで保育をして、保育の質の確保・向上に関する検討会に入っていました。保育の質、適切な援助というのは、その国の保育に関する理念や価値観、社会全体の構造・行政に関わっているということです。いわゆるその時、その場所によって違うことだと私は思います。今2023年11月25日金沢の保育での保育の質と札幌の質、10年前と10年後は違うんではないでしょうか。私が言いたいことは、今、目の前にいる子どもたちに本当に必要なものができているのかな、今のこの時代において、この保育は質が高いと言えるのかなと、その国の価値観をやっぱり金沢の人たちが共有している、札幌の人たちも共有している、私は東京出身ですがけれども、やっぱり違うと思うので、自分を振り返って、なぜ私はこの行動をしているのか、私はなぜこういう風に話をしたのか、なんでこんな環境を設定したのかと、常に見ていく必要があるんじゃないかなと思っています。

3 ニュージーランド教育セクター共通ビジョン

今日は、先週行ってきて少しアップデートした保育の質、適切な援助とは何かというニュージーランドの保育実践について話します。その中で「信頼モデル」が出てきます。ニュージーランドの教育省が出しているビジョンにはどんな子どもに育てて欲しいのか、一番右に書いてあります。「自信に満ち、繋がりをもち、積極的に参加し、生涯にわたる学習者」そして一番左に、『テ・ファリキ』です。

幼児教育が、小中高大学に繋がってきているというものです。

私は先ほどニュージーランドで小学校の先生もしたと紹介いただいたのですが、小学校の先生の資格は持っていません。私が持っているニュージーランドの教育資格は、0歳から8歳まで教えていい資格です。だから小学校1年生のとき5歳、6歳なので、その資格のまま働きました。

日本では小学校と幼稚園や保育園は、全く違うことをしていると感じていますが、私は幼児教育から小学校に行ったときも混乱しなかった。なぜなら先生たちの会話は、「何をどう知るか」ではなくて、「その子がどうしたら学びたいと思うのか」とか、「この環境は子どもたちに合っているのか」という話だったからです。日本で小学校教育をしたことない私がずっと入れたのは、このビジョンが共有されているからだと思っています。

ニュージーランドのLifelong Learnerという視点で考えると、例えば、小学校で働いていた時の同僚のアメリカ人は、ガラス細作家からニュージーランドで小学校の先生になるための学習を1年間してなりました。他には家族の都合でシンガポールに移住して、子育て後保育士の学習をして48歳からなった人もいました。その時のモチベーションやステージによってやりたいこととか変わってきますよね。働く場所も、ニュージーランド以外にも世界中にある。そう考えると、目の前にいる子どもたちはニュージーランドだけで活躍するわけじゃなくて、世界で活躍する。そのために何が必要かということ、自分に対する自信とか忍耐力とかそういうところが必要だと思います。そこがLifelong Learnerに繋がってきていると思います。

4 『テ・ファリキ』の子ども観・カリキュラム観 —あなたの学びのハンドルはあなたが持つ

テ・ファリキの子ども観

Competent and confident learners and communicators, healthy in mind, body and spirit, secure in their sense of belonging and in the knowledge that they make a valued contribution to society

Early childhood education in New Zealand

Kotahi te kōkano, he mui ngā hua o te rākau. A tree comes from one seed but bears many fruit.



This statement articulates that in our community we are all different, in many ways and we celebrate those differences while maintaining our relationship and wellbeing.

- ・生まれながらに学ぶことを熱望して、家族のもとにきている
- ・子どもは自分のやり方で世界を学んでいく
- ・子どもは(大人も)一人一人違って、それぞれ社会に貢献できる存在である
- ・子どもは有能で自信に満ちた学び手であり、他者との関わり手であり、心・身体・精神において健全で、安心して所属感を感じられ、自分の知識を社会にとって価値のある貢献ができる

『テ・ファリキ』の子ども観を読ませていただきます。

「生まれながらに学ぶことを熱望して、家族のもとにきている。」子どもは生まれながらに素晴らしい存在であり、「自分のやり方で世界を学んでいく」、「子どもは(大人も)

一人一人違って、それぞれが社会に貢献できる」と書いてあります。先週、ニュージーランド教育省の人も何度も言っていました。

カリキュラムの定義

- The term "curriculum" is used in this document to describe the sum total of experiences, activities, and events, whether direct or indirect, which occur within an environment designed to foster children's learning and development. (Te Whariki 1996)
- このドキュメントでは、「カリキュラム」という用語は、子どもたちの学習と発達を促進するために設計された環境内で発生する、直接または間接の経験、活動、およびイベントの合計を説明するために使用されます。

©Nacki Tajima

9

『テ・ファリキ』のカリキュラムとは何かを読みます。「このドキュメント（『テ・ファリキ』のことです）では、「カリキュラム」という用語は、子どもたちの学習と発達を促進するために設計された環境内で発生する、直接または、間接の経験、活動、およびイベントの合計を説明するために使用されます。」まとめてみると、園で起きる全てのことがカリキュラムであるという考え方です。「何かを教える」のではなくて、直接的にも間接的にもその環境の全てが、子どもたちの力を発揮するということです。

エンパワーメントは、拙著にも書きましたが、子どもたちと皆さんを車として動く必要な機能は全てある車だとします。そこにパワーが入る瞬間、エンジンがかかる時は、存在を認められて、安全と安心を感じていて、コミュニケーションが発揮できる時です。でも、いかに素晴らしい存在（車）であっても、この力が入らない限り、動かない。そのことをエンパワーメントと言います。日本だと社会福祉という言葉がよく使われると思いますが、子どもが、しっかりエンパワーメントされて動くということです。

繰り返しますが、ニュージーランドでは、大人がやる気を引き出すのではなくて、子どもはもうすでに学びたい存在、すでに成長している、熱望している存在と捉えます。では、「その存在はどういう環境だったら育ちやすいの？」と一人一人について考えます。

北海道の園には、254人の子どもがいて、254通りの育ちやすさがあり考えがある。だから、その254人の子どもたちの情熱を見つけてほしいという思いで、プレイ・ベースド・カリキュラム「遊びを通して学ぶ」を実践しています。ニュージーランドは、先生の割合が（日本より）多く、休憩を1日に3回ぐらいして、休憩中もその割合になるようにしているので、子どもたちが登園して、鞆を置いたら外に行っても、中に行ってもいいよとしています。そこで子どもたちは自分の情熱をもって遊びます。そのことを、「ドライブ・ユア・ラーニング」と言っています。「助手席に座らないで、なぜならあなたの学びのハンドルはあなた

が持つべき」ということです。子どもが助手席に座っている状態は、先生が「あっち行くよ」と主導権をもっている。子どもたちが自分で何をどのように学びたいか、速く直線に行ってもいいし、寄り道してもいいし、3、4人と一緒に行ってもいいし、1回休憩してもいいし、と考え、子どもがドライブできる環境をいろいろ設定しています。

子どもたちの前日や一昨日の姿を見ながら作る環境設定をニュージーランドでは、セットアップと言います。英語では、inviting environmentで、「いらっしやい」と子どもたちを学びに誘うような環境です。そこでは、なるべく自然物を使います。マオリ族は、「母なる大地が病気になったら私たちも病気になる」と考えています。近年、様々な気象災害などがありましたが、「母からもらったものは、私たちが使ったらしっかり母に帰すべきである」という考え方から、なるべく自然なものを使おうとします。それが、sustainable（持続可能）と繋がっていると思います。

またニュージーランドの先生たちのアイデアや、行事もたくさんありますが、今日はとばします。

5 『テ・ファリキ』の4つの原則と5つの要素

『テ・ファリキ』の話に戻ります。今日は、細かく触れませんが、人間が生きていく上で、この4つの原則は重要だとされています。学びを熱中、熱望している子どもたちが、力を発揮するためには5つのスイッチが必要だということが書いてあります。スイッチという言葉は使っていませんが、それがわかりやすいと思います。

みなさんちょっと想像してみてください。子どもに当てはめてみてもいいし、みなさんのバイト先やクラブ活動など今自分が属しているコミュニティを当てはめてください。バイト先で「私こんなアイデアあります」とか「こうしたらうまくいくんじゃない」という提案がある時、それを発揮するためには、5つのスイッチが必要です。「心身が健康である」、「その場所が心地いいと思う」、「公平であると感じる」、「コミュニケーション。話を聞いてくれる」、「好きなことをやっていいよ」という5つがあると、「じゃあ力を発揮しよう」となります。

私は遊べない子どもがいたら、この5つのスイッチのどれかが押されてないのではと思います。4つの原則については、今日は時間がないので話しませんが、拙著に書きましたので後で読んでください。例えば、「ウエルビーイングとはなんだろう」と先生がまず知らないといけないと思います。知ることによって今まで無意識的にやってきた保育を考え直す機会になるんじゃないかなと思います。

6 ラーニング・ストーリー

ラーニング・ストーリーは、写真と文字を使って、子ど

もたちの興味、関心などを書いて、そのまま保護者と子どもに共有するドキュメントです。共有することです。早速、ラーニング・ストーリーにどんなことが書いてあるのかを、うちの保育教諭が書いたものを読みます。

園庭で育てているネギが育ち、収穫しようと話していたときのことです。AちゃんとBくんが「何してるの？」と様子を見にきました。「ネギが大きくなったから取って、みんなで食べようと思ってるんだ」と伝えると、「Aも！」と言います。保育教諭と一緒にハサミで切り、無事に収穫！束になったネギを握りしめ、「取れたー！」と嬉しそうな表情が見られました。一緒に見ていたBくんも収穫しました。その様子を真剣な表情で見ていたAちゃんです。その後、ネギを鼻に近づけると、少し考えるような表情を見せたあと、「ネギの匂いがする！」と一言。保育教諭にも、匂いを嗅がせてくれました。そして、ネギはキッチンさんの元に行き、給食の味噌汁に入れてもらいました。給食が部屋に届いて、配膳する段階から興味を持ってお鍋の中をのぞくAちゃん。「A、食べる！」とはりきって用意して席につくと、まずは、お味噌汁の中をよく見て、「ネギ入ってる！」とパクリ。おいしそうに食べていました。

このような記録が日本版保育ドキュメンテーションと言われていますが、これはラーニング・ストーリーの一端です。じゃあこのAちゃんにとって、どういう意味があり、何が育っていると思いますか。そして、この子に明日会うとしたら何をしたいかを、今から2分ぐらい隣の人と話をしてください。(2分話し合い)

はい、ありがとうございます。では、説明をします。これ、食育のよくある話ですね。でも、ラーニング・ストーリーは、このAちゃんがネギと出会って、何を学んだと思うか、何に学びをドライブさせるための動作があったのかを掘り下げていきます。ここから分析に入ります。記録者の保育教諭の分析を読みます。ですが、答えはわかりません。答えは、Aちゃんが自分の力を発揮して学びたい環境を作ったから自主的、主体的という意味では、正解かもしれない。私たちは今推測をしているだけです。みなさんもここに50人いたら、50通りのアプローチがあって50通りの分析があるってことです。

お家ではネギはあまり食べないということで、やはり自分で収穫した喜びが大きいのではないかと感じた場面でした。以前から、花など植物に興味をもっていたAちゃん。野菜や果物を育てるようになると、さらに、気にかけるようになり、花が咲いたり実が大きくなったりする変化に気付く姿があります。今までも収穫したものを

食べるのを楽しみに嬉しそうに食べる姿が見られていましたが、今までの経験の積み重ねもあったか、今回のように普段あまり食べないものでも食べてみようと思えることに繋がったのではないかと思います。また、植物を見て変化に気付き、触れて匂いを嗅いでいろいろなものの性質を知っていく姿に五感の育ちを感じました。

と書いています。なるほど。保育教諭にしかわからないことがありますよね。そういう姿があったんだと。ここから明日と来月とか、このAちゃんが力を発揮するためにはこうした方がいいんじゃないかと保育教諭の分析が入ります。それが正解かどうかは、Aちゃんにしかわからないってことです。

野菜の成長を身近に感じたことで、今後、花や木の実など野菜以外の植物の成長への興味もさらに広がっていくかもしれないので、園庭以外の場所にも出かけ、様々な植物に触れる機会をつくと共に、その植物がどのように育っていくのか図鑑や絵本を一緒に見て成長過程を知っていけたらと考えます。

また、栽培物に興味をもったところから食べることを楽しんでいる様子がみられるので、今後収穫したときに食べ方を相談したり、今まで見たことがない調理法で食べることや家庭で料理をすることに興味をもっているということだったので、収穫したものを自分たちで調理できる機会をつくり、実際に触れたりできたり、匂いを感じたりする経験をしていきたいと思います。その中で、どんな新しい発見があり、Aちゃんが何を感じるのか楽しみます。

この分析を「なるほどね」と思う方も、「たしかに植物に興味もっているけども、先生とのコミュニケーション楽しんでいたのかもしれない」という方もいる。ラーニング・ストーリーは、自分が感じた通りに話をして、重要なのはこの書いた記録を他の先生や他の人たちと共有して「こうどう思った？」などと聞く。ここに価値があると思います。なぜなら子どものこと何より知っているのは保護者です。保護者とAちゃんの成長、学びたいと思っていることを共有する。さっきの5つのスイッチがありますね。

保護者と保育者はパートナーです。子どもの成長を喜び祝福するパートナーです。子どもたちはそのパートナーと結びつきながら成長します。

マーガレット・カー(『テ・ファリキ』とラーニング・ストーリーの開発者)が、子どもたちの1日に何回ぐらい学びの場面があるか調べてみました。子どもが8時半に来て17時半ぐらいに帰る間に、何個ぐらいあると思いますか。マーガレット・カーによると、「1日900の子どもたち

の学びがある」といわれています。5日来たら、4500の学びがあるということです。これから話したいことは、子どもたちが育っている一瞬のものをスポット的に切り取ろうという話です。『テ・ファリキ』の考え方は、子どもは既に学びたいと思っている、子どもは完全な状態であるという話でした。250人の子どもがいたら、250通りの育ち方があるという『テ・ファリキ』の考え方です。5人の子どもがいるとして、種を子どもに例えると、種によってどんな花を咲かせるのか、どんな風に実をつけるのか、決まっている。でも育つことはわかっている。うちは「おかだまのもり」という場所です。じゃあ育つために何が必要なのと考えます。

『テ・ファリキ』は子どもの成長をよく植物で例えます。まず土が必要です。栄養もいるから、「おかだまのもり」という栄養の場所に来ています。5人の育ち方があるけれど、それぞれどんな思いをはせているのかわからないです。もしかしたら、ダンスをやりたいっていうかもしれないし、作りたいと言うかもしれないし、わからない。例えば、その子に早く成長してほしいと思って、植物を引っ張ったら育ちますか。育たないですよ。子どもも一緒じゃないですか。植物が育つためにはやっぱり植物に適した水の量、気温、外なのか中なのか。例えば、サボテンはそんなに水いらなとか、トウモロコシみたいに一本だけじゃ育たなくて互いに受粉し合わないとか。水の量を先生の援助とすると、「水が多いほうが私は育ちやすい」なら水の量を多くする、「そんな干渉しないで、一人でやりたい、水いらな」なら水は減らす。だけど保育者が「これトウモロコシだ」と分かったら、トウモロコシ用に援助できるけど、子どもたちはみんな違って、どう育つのかわからないです。

だから子どもの今の姿を見て、さっきのAちゃんを見て、あーなるほど、ネギ、料理、友達、先生。これがAちゃんの育ちやすい一つのシーンだとわかる。それを切り取ります。その翌年の記録もその同じB君と公園で遊んでいる。ということはB君という存在はAちゃんが育ちやすい環境の1個の要因かもしれないと分かります。そのAちゃんが育っている瞬間のシーン「カッシャ」と映画のシーンのように切り取りそれを分析します。すると色々出てきます。それを毎月重ねていくと、Aちゃんの個性、こういうことが好きかな、こういうサポートがあったら育ちやすいんじゃないかと見えてきます。

今気づきましたが、Aちゃんのお父さんは、「おやじの会」という会に入っています。園で一回キャンプしてみたいという話があり、土日を使って10家族ぐらいの希望家族で、ホールにテントを並べました。そこでAちゃんのお父さんから「絶対俺は化学調味料使わない」、「煮干しをミキサー

でビーって碎いて出汁をとる」、「その出汁はティーバックに入れない。骨が溶けるぐらいまで煮て味噌汁を作る」と聞きました。そのお父さんの娘さんなので、なるほどと思いました。そういうつながりが見えてきました。

ここで信頼モデルが出てきます。皆さんもう一回信頼モデルって言うてもらっていいですか。「せーの、信頼モデル」はい、ありがとうございます。子どもは育つものだって信頼しきっているということです。子どもはすべて持っているという視点。では、欠乏モデルとは何か。ラーニング・ストーリーを伝えた大宮先生は、「欠けていること、できないことを見つけ出して、それを補うという視点」と書いています。信頼モデルは先生が子どもを信頼している、欠乏モデルは先生が子どもを心配しているという言い方ができると思います。

7 ラーニング・デスポジション（学びの構え）

1996年に『テ・ファリキ』ができましたが、その前までは、ニュージーランドではチェックリストを使っていたらしいんです。チェックリストには、「小学校入学時に有能とされるスキルチェックしよう」と書いてあります。例えば、自分の名前が読める、書ける、一から十まで言える、バックワード十から一まで言えるとか、三角、トライアングルとか言えるかとか。私は日本で働いていた時に年長クラスの担任をしていて、「あなた、そんなんじゃ小学校に行ったら困るわよ」と保育者に言われました。これもチェックリストですね。ちゃんと座っていないといけないうのもチェックリスト。保育士はチェックリストを作ったうえで、できないことをできるようにすることが目的でアセスメントをするということです。

日本の東京江戸川区で保育士をしていた僕の経験ですけど、3月末にね、「谷島君、来年年長さんお願いします」と言われます。そうなった時の僕の脳の構造は、「はい、この子たちが小学校に行くので、できないことを教えないければ」となりました。例えば、その園は運動会には全員逆上がりをやると決まっていた。さっきの話だと逆上がりができる子は、「だから今度、空中逆上がりをやってみよう」となりますが、そうではなく私は、「はい、逆上がりできない子は手上げて!」、「筋トレするから」と、4月から手押し車などの筋トレが始まるわけです。できない子をできるようにしないといけないというのが欠乏モデル。お互いキツイですが、しないと園長先生から「谷島先生のクラスってねー」と言われ、園長先生も「例年に比べて、谷島先生のクラスは残念」などと言われちゃいます。園長先生もプレッシャー、僕もプレッシャー、そのプレッシャーを子どもたちが感じる。つまり、できないことをできるようにする保育がニュージーランドでもなされていたが、「持つ

てるものもそれぞれ違うのに一つの小さな箱に入れるのではない、みんなすばらしいんじゃないの」と考え直されて『テ・ファリキ』の学びの成果はラーニング・デスポジション（学びの構え）だ、価値ある学びはそこだとなり、ニュージーランドの記録が変わったんです。

ラーニング・デスポジションは、よく言われているのは「学びの構え」です。デスポジションは、傾向とか指向とか、その子が好む方法のようなことです。このラーニング・デスポジションがあるシチュエーションで発揮されることが学びにとって重要だと書いてあります。読みます。「勇気と好奇心、信頼と遊び心、忍耐力、自信、責任をとる姿」。しかし、『テ・ファリキ』が1996年にできた時には「えー何すればいいの、今まで“文字が読める”は学びの成果だったのに？」と現場は大混乱したそうです。そこで記録がチェックリストだと『テ・ファリキ』が言っているものとやっているものが合わないとなり、マーガレット・カーはラーニング・ストーリーを作りました。

8 アセスメント

Assessment, planning
and evaluation

Let the uniqueness of
the child guide our work.



子どもの個性が
保育者の仕事を
導く

アセスメントは価値ある学びを可視化する。

保育者はアセスメントにより子どもたちが何を知っていて何ができるか、何に興味を惹かれるか、どのように学びが進んでいくか、どんな新しいまなびの機会が散りばめられているか、保育者が追加のサポートができるところがあるならそれはどこなのか、を理解する。

Assessment makes valued learning visible.

Kalako use assessment to find out about what children know and can do, what interests them, how they are progressing, what new learning opportunities are suggested, and where additional support may be required.

Te Whariki p.63

©Naoki Yajima

21

『テ・ファリキ』に書いてあるアセスメントは、私が『テ・ファリキ』で一番好きな言葉です。「Let the uniqueness of child guides our work 子どもたちの個性が保育者の仕事を導く。」

おとなが、その子のねらいを決めるのではなくて、子どもがどう育ちたいか、どんな方向に行きたいのか、何を学びたいのかをわかった上で、うちの園に254人いたら、254通りのサポートの仕方があるということです。

これがすごい肝です。アセスメントに何が書いて書かれているかということになります。アセスメントは価値ある学びを可視化するということです。保育者はアセスメント

により、子どもたちが何を知っていて何ができるのか、何に興味を惹かれているのか、どのように学びが進んでいくのか、どんな新しい学びの機会が散りばめられているのか、保育者が追加のサポートができることがあるなら、それはどこなのかを理解します。アセスメントは、その子のことを知ろうということですね。

これから動画を見ます。見るときにこの2つの視点を見ていただきたいです。子どもの興味、関心、情熱が子どもの学びをとらえる視点でもあります。そしてその学びを分析するためには、まず、どんなラーニング・デスポジションを発揮しているのかということと、どのような非認知能力があり、認知能力がつながって育っているのかの2つの視点をもって見てください。（会場参加者と動画を視聴後、「この子はなにを学んでいるのか、どんなスキルを発揮しているのか」と分析した後に、「明日この子に会うとしたら、何をしたらいいのか、モノを用意するのか、声をかけるのか、場所を用意するのかしないのか」を共有する。紙面の都合上省略）

9 まとめ

まとめです。Aちゃんの興味関心を植物として考えたら、育ちやすいということがありました。保育者だけの視点だけじゃなくて、保護者、おじさん、おばさん、地域の人、いろんな人が関わってることもわかりました。一般には、担任だけ記録するけれど、園長の私も、主任の先生も書きました。すると保護者は、「担任の先生だけが私の子を知ろうとしてたんじゃなくて、主任の先生、隣のクラスの先生も私の子どものラーニング・ストーリーを書いてくれるのは本当に嬉しい、感動した。」と言いました。このラーニング・ストーリーが綴られたポートフォリオは保育者と子どもと保護者とのコミュニケーションツールになっています。今Aちゃんは2歳4か月ですが、Aちゃんにも今後絶対書いてもらいます。ニュージーランドの研究では、95%の子が卒園してから自分のポートフォリオを見返すらしいです。そして、なんと、今回Aちゃんのお姉ちゃんも書いてくれたんです。「大好きなA、友達いっぱい作って遊んでね」みたいな言葉が平仮名で書いてありました。素敵ですよ。ラーニング・ストーリーを紡いでいくと、その子の成長の過程が見えるし、子どもの時の自信を大人になった時に見返してエンパワーする可能性を持っていると思います。ありがとうございました。

参考文献

ニュージーランドの保育園で働いてみた 子ども主体・多文化共生・保育者のウェルビーイング体験記 谷島直樹

ひとなる書房 2022年